



人の華。

暦の上では立秋を過ぎても、長沼の熱さはまだまだ終わらない。町の人々の心を燃やし続ける、長沼まつりがあるからだ。

淡い闇のかなたからやってくる、炎の祭り。生命を吹き込まれた数々のねぶた、ねぶたが待ちかねたように躍り出し、ハネト（跳入＝踊り手）がはちきれんばかりに躍動する。

桜の便りが届く頃、もう町では祭りの準備が始まっている。資金集め、材料の調達、下絵の準備……骨組みが進むと、厚手の和紙を貼り付けて、次は絵柄の書き割り。最後の追い込みの彩色まで進めば、いよいよお祭り気分は高まってくる。

祭りの日、各地区でつくられたねぶた、ねぶたが、次第に集まってくる様子は壮観だ。威勢のいい若衆が、これから宵に向かって繰り広げられる色鮮やかな風景を予感して、目を輝かせている。みんな笑顔だ。夕刻から、長沼のメインストリートは、フリースペースとなる。次々に、祭りの衣装に身をまとった子供たちが集まってくる。ここが、年に一度のハレの広場だ。そして、宵の余韻も消え、あたりが闇に包まれるころ、子供みこし、踊り流しに続いて、いよいよねぶた、ねぶたが登場する。

紙と明かりの幻想……。その美しさと強さ、そしてたくましさ、人の心を熱く燃やす。ラッセラー、ラッセラー……勇壮な掛け声がこだまする。年に一度、一瞬の輝きのために準備を重ねてきた者たちが、いま、一斉にはじけている。祭りのあるところに、人が生きていく。そんな素晴らしい光景を見た。